

第二章 縄文時代

第一節 縄文時代概説

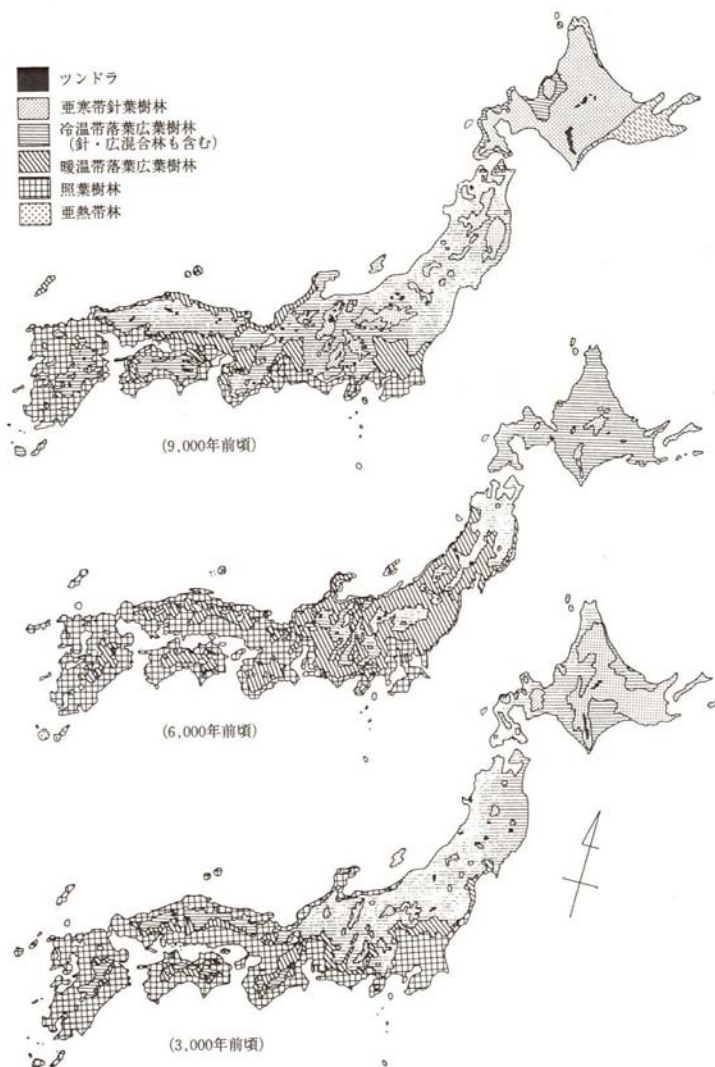
一 自然環境の移り変わり

気候と地形の変化

第四紀更新世終末まで続いた寒冷な気候も、今から約一万年前の完新世に入るとしだいに温暖になってきた。この地球規模の温暖化により山地や高緯度地方に形成されていた氷河の水が解け始め、海水が増加して、日本周辺では津軽海峡にあった陸橋が水没し、日本海と太平洋が直接つながった。

約八〇〇〇年前になると対馬海峡から暖流の流入が活発になり、日本海の海水温度は上昇していった。その後、海面が更に上昇し、約六〇〇〇年前には海進現象が頂点に達した。この時期は気温が現在よりわずかに高く、海面も三メートル前後上昇していたと推定されている。この時期以降、河川の堆積作用も盛んになり、縄文時代終末に起こった海退現象の結果、内陸に沖積平野が形成された。

第2章 縄文時代



第1図 縄文時代の日本列島の植生図と古地理の変遷

(安田喜憲氏原図)

植物相の変化

このような気候の温暖化によって、日本海側を中心に多量の雪がもたらされたが、降水量の変動も原因となつて自生する植物も変化していった(第1図)。それまでの冷温帯落葉広葉樹林に代わつて、縄文時代に入ると暖温帯常緑広葉樹林(照葉樹林)が拡大した。九州を除く西日本で照葉樹林が優勢を占めたのは約七〇〇〇年から六〇〇〇年前であつた。照葉樹林では、シイ・カシなどの堅果類が豊富に実り、中部地方から北海道の落葉広葉樹林でも、ブナ・ナラ・クリ・クルミなどが取れた。ほかに、ヤマイモ・サトイモ・ユリ根・カタクリ・クズなどが自生し縄文人の食料となつていたと考えられる。

動物相の変化

自生する植物の変化に伴い、そこに生息する動物も温暖な環境に適応した多彩な種に変わり、その骨格や遺骸が、生活廃棄物を捨てた貝塚などから多量に発見されている。

海生動物としては、マダイ・スズキ・イワシ類・マグロなどの魚類やハマグリ・カキ・アサリ・オキシジミ・アワビ・サザエなどの貝類のほかに、関東・中部以北の沿岸部ではクジラ類・イルカ類・アシカ・アザラシなどの哺乳動物の骨が発見されている。陸生動物では、本州から九州にかけてイノシシ・ニホンジカ・ツキノワグマ・ニホンザル・タヌキ・オオカミ・キツネなどが、北海道ではエゾシカ・ヒグマ・キタキツネなどが見つかつている。また魚類ではコイ・フナ・ウナギなどがあり、東北から北海道の河川ではサケやマスが捕れた。

これらの動植物は、季節の変化により捕獲・採集される種類は異なつていたが、全体としては現在の日本列島周辺でみられる自然環境の基本相がこの縄文時代に形づくられている。